



## 紙の裏表

# 大槻義彦

私の左の鼻穴には常に妙な炎症がある。絶えずみずっぱなが流れ、わずかな温度変化に過敏に反応しくしゃみが出る。だからいつもちり紙は手放せない。知らないひとは気の毒そうに、風邪ですか、と聞く。

私は極端に物が無い終戦直後に小学生だった。だからだろうが、異常にケチである。絶えず流れつづける鼻水にティッシュペーパーなどもつたいなくて使えない。実際のティッシュペーパーは学校の教科書を印刷してもおかしくないほど綺麗で上品で上等ではないか。

実にもつたないから私の鼻水ごときで汚してはいけない。しかし今時新聞紙で鼻をかむわけにもゆかず密かにトイレットペーパーを使うことになる。一週間にひとロールほど使う。このトイレットペーパーがすばらしい。適度にやわらかく、私の鼻に良く馴染む。

時に真水のように、時に米のりのように、外気温によって粘性が極度に化する私の鼻水に良く適応するすばらしさ。こんなすばらしい紙を作る国を私は尊敬する。

若いとき、フランス、ストラスブール大学の客員助教をやっていた。このホテルや大学のトイレットペーパーには驚いた。まずロールになってなく一枚一枚長さ10センチぐらいに切れているではないか。一枚しか使わない、ということなのか。しかも真っ白ではなく薄茶色。もつとも驚いたのはこれがゴワゴワしていることだった。週刊誌のグラビアページのようなやつでこれで流していいのか、とまごついた。

フランスはその頃世界第二位の先進国だったから、私は感心した。密かにトイレットで実験するとこの厚紙、みごと水に流れたのだった。ところがその夏休み、同じ先進国、イタリアに旅行した。安ホテルに同じようなトイレットペーパーがあったが、なんとトイレに流さないでください、と書いてあるではないか。同じようなトイレットペーパーであったが、水

大槻義彦(おおつき・よしひこ) ●1936年宮城県生まれ。東京大学大学院数物系研究科修了後、東京大学助手などを経て現在、早稲田大学名誉教授、客員教授。物理学雑誌「リテイ」編集長。著書に「本気で本当のクラブ選び」(共著)、「大学生のための基礎力学」、「大槻教授の反オカルト講座」など多数。



に溶けなかった。実際密かに実験して確かめた。

その頃イタリアはストライキつづきでまともに列車も運行されず、郵便も届かなかった。トイレットペーパーすら満足でないのか、このままでこの国は大丈夫なのか、とすら思った。ところがこんなのはまだ良かったのだ。フランスからの帰途、旧ソ連、モスクワ大学を訪問、その宿舎に泊めてもらって驚いた。水に流せないゴワゴワ紙はおろか、紙そのものがなかったのだ。もちろん新聞紙で用をたしたが、戦後の小学生時代を思い出した。

この国はダメだ。ノーベル賞級の物理学者がゴロゴロしていてもトイレットペーパーもない大学。これでやっていけるわけではない、と確信した。イタリアは持ちこたえたがソ連はつぶれた。まさかトイレットペーパーが国の繁栄のパロメーターになるとも思えないのだが。

### Let's think together! 地球温暖化を防ぐ私たちの小さな一歩 ①

#### たとえ小さな努力でも、地球にとっては大きな一歩。

地球温暖化を防ぐために、製紙産業はさまざまな取り組みを行ってきました。まず、効率の良い設備を導入することで化石エネルギーを削減。同時に、環境負荷の少ないバイオマス・廃棄物エネルギーへの転換も図ってきました。また、森林の果たす役割を誰よりも知っている私たちは、CO<sub>2</sub>の吸収・固定に役立つ植林事業を国内外で推進するなど、懸命に努力を続けてきました。



しかし、温暖化問題の真の解決のためには、私たち一人ひとりが自分のライフスタイルについて考え直してみることも必要です。クールビズを謳った「チーム・マイナス6%」の活動のように、一人ひとりにできることは小さくとも、その積み重ねが大きな成果へつながる——そう信じて、私たちはこれからもみなさんと手を携えて、豊かな地球を守っていきたいと思います。

コラム「Let's think together!」は、今回で終了し、次回より新シリーズが始まります。

◆次回は5月4・11日号、高見のっぼさんです。

リーガロイヤルホテル東京 ガーデンラウンジにて